

現代の国語・言語文化

第1問 次の文章を読んで、後の問（問一～問七）に答えよ。

私は二〇一一年に『暇と退屈の倫理学』という書物を発表した。この書物の主張の一つは消費と浪費を概念の上で区別することであった。これは本稿の出発点となる議論であるから、はじめにそれを確認しておきたい。

同書は哲学を議論のベースとしているが、先の区別を論じるにあたって私が取り上げたのは、これまで哲学においてはほとんど論じられることのなかった贅沢アゼタクの概念である。贅沢とは何か。それは必要の限界を超えた支出である。

この場合、必要とは人間が生存していくために最低限なくてはならないものを意味している。必要を超えた支出なので、贅沢は不要である。たとえば、豪華な食事は人間が生存していくために最低限なくてはならないものであるとは言えない。また、ふんだんに装飾を施された衣装がなくても人間は生存していける。

つまり、もっと強い言葉を使って言えば、贅沢とは無駄である。

だが、生存に必要なものだけがある生活とはいかなる生活であろうか。それは何かアクセシブリティがあつた時に容易に崩れ去ってしまうようなギリギリの生活である。ギリギリの生活の中で、人は豊かさを感じる事ができるだろうか。

腹八分目と昔から言う。それが健康にもよいのだろうか。人間の生存にとつてはその方が望ましいのかもしれない。だが、やはり人間はたまには美味おいしいものを十二分に、腹一杯に食べたいと思うのではないだろうか。あるいは、服装にこだわること、自分らしさを感じられることもあるのではないだろうか。

この点を論じるために私が参照したのが、フランスの社会学者ジャン・ボードリヤールの議論である。

ボードリヤールは『物の体系——記号の消費』（一九六八年）で次のように述べた。

どんな社会も豊かさを求めたし、贅沢が許された時にはそれを享受してきた。あらゆる時代において、人は買い、所有し、楽しみ、使った。「未開人」の祭り、封建領主の浪費、十九世紀ブルジョワの贅沢……他にもさまざまな例が挙げられるだろう。

贅沢を享受することを「浪費」と呼ぶならば、人間にとって浪費は、豊かさを感じ、充実感を得るために欠かせないものであったと言いうことができる。

A、最近になって人間は全く新しいことを始めたのだとボードリヤールは指摘する。それが「消費」である。浪費は必要を超えた支出を意味するのだった。必要を超えた支出なのだから、浪費は満足をもたらず。満足すれば、そこで浪費は止まる。十二分に食事を取ったならば、そこでお腹なかはいっぱいになり、食事は終わる。つまり浪費には終わりがあ

る。それに対し、消費には終わりがない。なぜか。消費が物そのものの享受ではなくて、観念や記号の受け取りだからである。

B グルメブームのようなものを考えてみるとよい。あるお店が流行しているからという理由で人はそこに赴く。そして一定の時間が経つと、今度は流行している別のお店に赴く。どうして人がこのような行動を繰り返すのかと言えば、それは「あの店に行った」という観念を受け取るためである。観念の受け取りには制限がない。だからこの消費行動には終わりがない。

これを応用すれば、経済は人間を思いのままに、終わりなき消費のサイクルへと向かわせることができる。二十世紀はこれを大々的に展開し、大量生産・大量消費・大量投棄の経済を作り上げ、人類史上、前例のないほどの経済成長を遂げた（また、前例のないほどの環境破壊を行った）。

消費社会と呼ばれるこの経済体制の中では、我々は知らぬ間に消費者に仕立て上げられる。浪費家になって満足する

ことを求めても、いつのまにか消費者にされてしまう。そして消費には終わりが無い。だからいつまで経っても満足が訪れない。

我々は浪費家になって、物を享受し、楽しんでよいはずなのに、消費者になるよう仕向けられ、終わりのない記号消費のゲームに引きずり込まれている。

ならばどうしたらよいか。物を受け取り、物を楽しめるようになればよい。楽しむことによつてこそ、我々はこの記号消費ゲームの悪循環から抜け出すことができる。

「C」このゲームに依存している社会を変えることができる。楽しむことは社会の変革をもたらす。これが『暇と退屈の倫理学』における私の提案の一つであった。

だが、ここには大きな哲学的問題があった。楽しむとはどういうことなのか、それが実はよく分からないのである。

哲学は美については古代からよく考えてきている。ところが、楽しさとか楽しむといったことについては実はほとんど考察がない。これは美しいものに比べて楽しいことはレベルが低いと思われるからかもしれない。

けれども、先に説明した消費と浪費の区別から出発して考えるならば、この問い自体は決して低次元のものではない。^エむしろ二十一世紀の社会を考える上で必須の問いであるとすら言える。

本稿は私にとつて、この十年來の課題に対する現時点での一つの答えである。この課題に取り組むにあたり、一つの日本語の単語を取り上げようと思う。「嗜好品」^{しこうひん}という語である。

「嗜好品」はそれ自体でどこか独特な雰囲気を感じさせる。しばしば他の言語にはこれに相当する語がないと言われる。辞書ではどう定義されているのだろうか。『大辞林』によれば、嗜好は、「たしなみ、好むこと。趣味。特に、飲食物についての好み」を、嗜好品は、「栄養のためでなく、味わうことを目的にとる飲食物。酒・茶・コーヒー・タバコなど」を意味する。

「栄養のためでなく」という断り書きが付いている点は興味深い。栄養は生存のためにどうしてもなくてはならないものである。それに対して、嗜好品は単に「味わう」ためのものである。どうしてもなくてはならないものではない。とは

いえ、この語には、余計とか不必要といったニュアンスは感じられない。ただ単に「味わう」ことが強調されている。この語は本来に日本語にしか存在しないのだろうか。世界中の言語を広範囲に調査することはできないので、英語とフランス語とドイツ語についてのみ簡単な検討を加えてみたい。

英語の中に嗜好品に相当する語を探そうとすると見つかるのは、Luxury goods とか a luxury といった表現である。また、フランス語では、Luxury の語源である Luxe を使った produit de luxe という表現が用いられる。【段落Ⅰ】

これら英語およびフランス語の表現のニュアンスは明らかであって、「大きな価値をもつもの」という意味である。また、英語の Luxury とフランス語の de luxe はもちろん細かく検討していけば様々な意味の違いを指摘できるのであるが、そこに、「不要である」とか「非本質的である」といったニュアンスが共通していることも論をまたない。【段落Ⅱ】
注目すべきはドイツ語である。

この言語には Genußmittel という語がある。genießen は「楽しむ」「味わう」の意の動詞で、Genuß はその名詞形。Mittel は手段を意味する。したがってこの語は「楽しむ手段」とか「味わう手段」を意味しており、或る独々辞典はその語義を、「その栄養価のために消費されるのではなく、その良い味、その刺激効果、または同様のもののために消費される何か（食べ物、飲み物など）」と定義している。【段落Ⅲ】

この語が日本語の嗜好品と非常に近い意味を持つことが分かる。興味深いのは、或る独英辞典がこの語の語義として、「茶、コーヒー、アルコール飲料、タバコなど」と例だけを挙げるに留めていることである。言うまでもなくこの事実は、英語で Genußmittel を表現することの困難を意味している。この困難は「嗜好品」を英語に翻訳する困難とほとんど同じである。【段落Ⅳ】

以上の簡単な調査から分かるのは、日本語以外にも「嗜好品」に相当する単語を持つ言語は存在しているけれども、確かにそれに相当する単語をもたない言語も存在しているという単純な事実である。

我々は或る言語に或る単語が欠けているという事実を拡大解釈することのないよう注意せねばならない。以上の事実

は英語圏やフランス語圏には嗜好品についての考察が欠けているということを示し意味しない。「茶やコーヒーやアルコール飲料やタバコは云々」という仕方です。深い考察がなされていることも十分に考えられるのである。また同じく、「嗜好品」に相当する語を持つからといって、その言語の用いられている地域で嗜好品についての深い考察がなされていると考えることもできない。

D、ドイツ語が「嗜好品」に相当する語を持つという事実は、日本語の「嗜好品」という語を眺めるところから始まった本稿の考察に対し、ドイツ語圏においては本稿の問題意識を深めるための手がかりとなる考察が既に行われた可能性があると見込みを与える。

そしてこの見込みは当たっていた。ドイツ語で書かれた哲学者のカントが *Genußmittel* についての考察を残しているのである。

(國分功一郎著『手段からの解放 シリーズ哲学講話』に基づく)

問一 傍線部ア「贅沢の概念」とあるが、筆者は贅沢をどのようなものと考えているか。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、

- ① 最低限必要なものだけで生活することで、心を豊かにするもの。
- ② 日常生活において無駄な支出であり、可能な限り抑制すべきもの。
- ③ 金銭的に恵まれ、生活に余裕のある者だけが享受できるもの。
- ④ 生活にゆとりをもたらし、人に充実感を与えてくれるもの。

問二 空欄 ～ に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、

- ① A ただし B とりわけ C つまり D ところが
- ② A たしかに B すなわち C すると D たとえば
- ③ A ところが B たとえば C そして D とはいえ
- ④ A したがって B もっとも C さらに D そこで

問三 傍線部イ「『消費』である」とあるが、筆者は消費をどのように考えているか。適切でないものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、

- ① 消費は、物を受け取るのではなく観念や記号を受け取る。
- ② 消費は、必要な支出を超えた食事になるので、満足を感じられない。

- ③ 消費は、物に付与された観念や記号を対象とするため、満足を得られない。
- ④ 消費は、満足することがないので、止まることがない。

問四 傍線部ウ「消費社会と呼ばれるこの経済体制」とあるが、この「経済体制」とはどのようなものか。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、エ。

- ① 消費者が物に満足するとすぐに、次の物を生み出すことで、市場を回し続けている。
- ② 物のリサイクルシステムを構築することで、欲しい物が常にある大きな市場を生み出した。
- ③ 大量生産した物を大量消費する仕組みを応用して、国民に浪費を促すようになった。
- ④ 人々が浪費して満足するのではなく、満足をもたらさない消費を続けるため、拡大し続けている。

問五 傍線部エ「むしろ二十一世紀の社会を考える上で必須の問いである」とあるが、どのような問いを指しているか。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、オ。

- ① 楽しむとはどのようなことか。
- ② 哲学が考察する対象は美だけでよいのか。
- ③ 消費社会を変革するために必要なことは何か。
- ④ 消費と浪費の違いはどこにあるのか。

問六 次の段落は、どの段落の後に挿入するのが最も適切か。次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、カ。

そう考えると、味わうことや楽しむことを主眼とした嗜好品という日本語との違いは歴然としていと言わねばならない。嗜好品という日本語は、大きな価値をもつとか、不要ないし非本質的であるとかいったニュアンスとは無縁であり、楽しんだり味わったりするための対象を「嗜好」という言葉で積極的に指示しているからである。

① 【段落Ⅰ】

② 【段落Ⅱ】

③ 【段落Ⅲ】

④ 【段落Ⅳ】

問七 本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、キ。

① 消費社会において人々は贅沢に慣れてしまい、簡単には満足しなくなってしまう。それを克服するためにはまず楽しむことは何かを明らかにしなければならない。

② 精神的に余裕をなくしている消費社会を変えていくためには、誰もが嗜好品を楽しめるような社会を目指すべきであり、筆者はそのヒントを欧米社会に見いだしている。

③ 観念や記号の受け取りから満足を得るためには、嗜好品という言葉の意味を再考すべきであると考えた筆者は、ドイツ語にも同じような言葉があることに気づき、カントの哲学に関心をもつ。

④ 終わりのない消費社会を変えるためには、物を楽しむことが重要である。筆者は楽しむとはどういうことか考える上で嗜好品という言葉に注目し、同じような意味の言葉を持つドイツの哲学者カントの考察にたどり着く。

第2問 次の文章を読んで、後の問（問一～問六）に答えよ。

音楽学にしても音楽教育学にしても、「音楽」というものを中心的な課題として正面から扱おうとするような学問はど
うしても、音楽は「芸術」であったり「情操」を豊かにするものであったり、といったことを暗黙の前提として出発して
しまうことになりがちです。ここでは、校歌をとらえる上で、「芸術」としての音楽という前提をいったん捨てて、共同
体を形成したり、維持、発展させたりする機能をもつ音楽としての「コミュニティ・ソング（共同体歌）」の一変種とし
て位置づけるといふ観点から出発したいと思います。その前に、これまで音楽研究に携わるわれわれが校歌という対象を
前にしたときに、暗黙のうちにそれを「芸術作品」とみなすような見方をしてしまう習性があり、そのことが、われわ
れが校歌のあり方を考えようとする際に、いかに足かせとしてはたらし、考え方を歪めてしまっていたかということを示
す、一つの具体的な実例をご紹介しますことからはじめようと思います。そしてこの例は、べつに校歌だけの問題というわ
けではなく、われわれが音楽やそこに形成される文化のあり方についてももう少し一般化して考える上でも、ひとつの重要
な問題提起になってくれるはずですよ。

東京にT女学院という学校があります。一八八四（明治十七）年に女学校として開学した歴史ある私立ミッション系の
学校です。この学校には、北原白秋の作詞、山田耕^{やまだ こうさく}笹の作曲で一九三四（昭和九）年に制定された校歌があります。北原
白秋・山田耕^{やまだ こうさく}笹といえは、校歌制定が活発化したこの時期に数多くの学校の校歌を残した「黄金コンビ」として知られて
いますが、このT女学院の校歌はその典型であると同時に、それらの中でも代表作と言ってもよいくらい質の高い作品で
す。

もう十年近く前のことになるのですが、この校歌をめぐって、ちょっとした出来事がありました。現在歌われている
校歌は原曲とはだいぶ違っているのです、それをオリジナルの形に戻してほしいと要望する声の一部の卒業生から上がっ

たのです。学院では、校歌に関する委員会を立ち上げてそこにいたった経緯を調査したところ、現在歌われているのは、一九五二（昭和二十七年）年から一九七二（昭和四十七年）年まで中学部・高等部に勤務していた音楽教員が「編曲」を加えたものであることが判明しました。両者の違いについてここで詳細に述べる余裕はないのですが、一番大きな違いは、もともと長調だった原曲が二度下げられてへ長調になったことです。主旋律自体が変わるようなことはありませんが、移調に伴って低音部が薄くなって女声合唱的な響きが前面に出るような形に書きかえられたほか、^{（注）}和声付けやリズムにも一部変更がみられ、音の動きがさらに変化に富んだものになるなど、細かい違いがいろいろあることがわかりました。【段落Ⅰ】

私はたまたま、その成り行きを知ったのですが、その話をきいたとき、まさに校歌というジャンル特有のあり方由来する問題であることを痛感させられたのでした。この問題にはじめて気づき、オリジナルに戻すことを求めた卒業生の姿勢は、「X」に対する考え方としてはきわめてまっとうなものです。クラシック音楽の世界では、とりわけ十九世紀後半から二十世紀初頭くらいにかけて、演奏家が自らの感覚で原作にさまざまな変更を加え、原作者の表現が歪められるようなことも少なくなかったのですが、その後、そのような後世の変更を排除する「原典主義」の考え方が唱えられるようになって、二十世紀後半には定着し、楽譜もそれらを排除した「原典版」を使うことが当たり前になってきた、そんな歴史がありました。その意味ではこの校歌に関しても、後世の受容の中で歪められた変更を排して、山田耕筰の「原典」の響きを取り戻すべきだとする卒業生の姿勢は、まさにそのような考え方に沿うものでした。この申し入れをしてきた卒業生は音楽大学などで実技科目の教鞭をとっている方とこのことですので、まさにその専門家としての知見を生かし、母校の校歌が少しでも「本来」のものに近い形で歌われ、継承されてゆくことを願って、音楽の専門家としてそのような申し入れをされたのだらうと思います。

ただそこで問題になるのは、そのような扱いが校歌のような場合にも本当に適切であるのだらうかということです。校歌に限った話ではなく、音楽には「愛唱歌」と呼ばれているようなレパートリーがあります。単に「芸術作品」として鑑

賞する対象ではなく、人々が歌い継いでゆくことによって後世への伝承がなされてゆくようなレパートリーで、それらの曲はしばしば、個人的なものであることをこえて、その共同体に属する多くの人々の共有財産として、また共同体の集合的記憶をなすものとして、ときには人々のアイデンティティのよすがとなるような役割も果たしてきました。【段落Ⅱ】

ブラームスの『子守歌』という曲がドイツで「愛唱歌」として定着してゆく過程で、複雑だったリズムが単純化される形で歌われるようになっていったことはよく知られていますが、日本でもたとえば、瀧廉太郎の作曲した『荒城の月』にある、原曲では半音下がりがだった「春高樓のはなのえん」の「え」の部分の音が、全音下がりの形になって広まるというような事態がありました。これらの曲が「愛唱歌」として多くの人々に歌い継がれるような存在になってゆくことはいわば代償として、作曲家の残した原典が、より歌いやすい形に、また人々の嗜好にとってより自然であるような形に変形されることで、^(注2)人口に膾炙するようなものとして引き継がれることが可能になったというようなケースは決して少なくないのです。

T女学院の校歌の場合にも同じようなことが言えるのではないのでしょうか。この校歌は、音楽教員の「編曲」で一音下げてへ長調になることで音域が変わり、多くの人に歌いやすいものになりました。そこにさらに、和声やリズムの改変などのちょっとした要素を加えることで随所にキラリと光る輝きが得られ、戦後世代の新しい感性をもつ人たちをも惹きつける魅力が加わったという面もあるように思います。音楽教員がこの改変に際して、山田に了承してもらったために自宅を訪ね、簡単に了承を得たという話があります。この話にどの程度信憑性があるのか、確証を得ることは難しいかもしれませんが、ほかならぬ山田自身が、瀧廉太郎の『荒城の月』の半音を全音に書き換えた当の本人だったという事実を考えると、ならば、「愛唱歌」として歌われ続けてゆくためのそのような書き換えの効果を十分に知っていた山田が、自身の曲についてもその改変を積極的に許容したということは、十分にあり得る話であるように思えます。【段落Ⅲ】

「芸術作品」である以上、作者の意図は尊重されるべきであり、後世の勝手な改変は許されないとするのは、もちろんひとつの立場ではあるでしょう。しかし、そのような改変があったからこそ人口に膾炙する存在になり得たようなさま

さまざまな事例をみるにつけ、この種の「愛唱歌」的な曲に対して「芸術作品」のそのような判断基準を一律に適用し、作曲当時の姿で歌うことだけにこだわる結果になってしまおうということになると、少しばかり一面的になりすぎてしまおうように思われてきます。長い年月にわたって多くの人々に歌い継がれ、守り育てられてきた校歌などの「コミュニティ・ソング」はまさに究極の「愛唱歌」ともいえるものです。その校歌が今日まで、さまざまな形で歌われるなかで形作られてきた歴史が、そこには刻み込まれていますし、今後また新たな価値が発見されたり違った意味づけをされたりしながら受け継がれてゆく可能性も大いにあるのです。「芸術作品」的な価値だけにこだわることは、そのような可能性をすべて断ち切ってしまうことにもなってしまうのではないのでしょうか。【段落Ⅳ】

T女学院は最終的に、二〇一五（平成二十七）年から二〇一六（平成二十八）年にかけて制作された楽譜やCDでは、山田の原曲版と音楽教員による編曲版の両者を並行しておさめるというやり方をとりました。今後も、歌う機会の状況に応じて両者を使い分け、場合によっては、この二つのヴァージョンだけでなく、山田の原曲をへ長調で歌ったり、編曲版を原調のト長調に戻して歌ったり等々、柔軟性をもって使ってゆく意向とのことです。^ウこれはとても^{注3}リーズナブルなやり方であるように私は思います。

われわれがひとつの楽曲を前にしたとき、それを「オーセンティック（真正）」な形で守ってゆこうとするのはもちろん当然の態度でしょう。しかしその際に暗黙のうちに、「芸術作品」的なオーセンシティブ（真正性）だけが想定されてしまい、作者の残したオリジナルな楽譜に忠実に演奏することのみが唯一の「オーセンシティブ」なあり方だと考えられがちでした。しかし、共同体の維持や発展という目的と結びついて歌われる「コミュニティ・ソング」のようなケースには、そういう「芸術作品」的なオーセンシティブとは違った形での「オーセンシティブ」なあり方をも想定する必要がありますがあるのではないのでしょうか。もちろん校歌だって「芸術作品」には違いなく、山田の作ったT女学院の校歌などはまさに質の高い「芸術作品」にほかならないわけですが、それが共同体の中で歌われる歌であるという限りで、そこにはそれとは違った価値観もまた重なり合っており、それぞれの価値観や枠組みに応じた複数の「オーセンシティブ」が想定さ

れてしかるべきなのではないか、そんな風に思うのです。

(渡辺^{わたなべひろし}裕著『校歌斉唱！日本人が育んだ学校文化の謎』に基づく)

(注) 1 和声付け……メロディに和音(コード)を付けて伴奏を作成すること。

2 人口に膾炙する……人々の話題にあがって広く世間に知られる。

3 リーズナブルな……ここでは、「理にかなった」という意味。

問一 傍線部ア「校歌というジャンル特有のあり方」とあるが、どのようなものか。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、。

- ① 校歌は「コミュニティ・ソング」の一変種と位置づけられ、共同体の形成、維持、発展の機能をもつ。
- ② 校歌は「情操」を豊かにするものではなく、「コミュニティ・ソング」として作られる。
- ③ 校歌は校歌制定が活発化した時期に北原白秋・山田耕筰という「黄金コンビ」の代表作として制定された。
- ④ 校歌は原曲が編曲されることがあるため、卒業生などからオリジナルに戻してほしいと要望されやすい。

問二 空欄 に入る言葉として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、.

- ① コミュニティ・ソング
- ② 芸術作品
- ③ 編曲
- ④ 原典主義

問三 傍線部イ「さまざまな事例」とあるが、その事例として適切でないものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、.

- ① 音楽教員によるT女学院の校歌の「編曲」
- ② 十九世紀後半から二十世紀初頭くらいにかけて行われた演奏家による原作の改変
- ③ ブラームスの『子守歌』における複雑だったリズムの単純化
- ④ 瀧廉太郎の『荒城の月』の「春高樓のはなのえん」の「え」の部分の音の全音下がり

問四 次の一文は、どの段落の後に挿入するのが最も適切か。次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、工。

そういうケースではしばしば、伝承のさなかで原作の楽譜に改変が加えられるというようなことが起こり得るのです。

① 【段落Ⅰ】 ② 【段落Ⅱ】 ③ 【段落Ⅲ】 ④ 【段落Ⅳ】

問五 傍線部ウ「これはとてもリーズナブルなやり方であるように私は思います」とあるが、筆者がそのように評価するのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、オ。

① 歌う機会の状況に応じて原曲版と編曲版を使い分けるなど柔軟性をもって使ってゆくことで、多くの人がこれまで以上に校歌に親しむようになり、校歌のもつ芸術的な側面が高まる可能性が期待できるから。

② 「芸術作品」的な価値にこだわることを避け、これまで人々が歌い継ぐなかで形作られてきた歴史をふりかえり、今後新たな価値を発見し意味づけながら受け継いでゆく可能性につながるから。

③ 暗黙のうちに想定していた校歌のもつ「芸術作品」的な「オーセンシティブ」が払拭され、共同体の維持や発展という目的に結びついた「コミュニティ・ソング」としての「オーセンシティブ」の強化につながるから。

④ 校歌は「芸術作品」ではあるが、共同体の中で歌われるということを考えると、「芸術作品」とは違う価値観や枠組みに応じた複数の「オーセンシティブ」を想定してとらえる必要があるから。

問六 本文の内容についての説明として適切なものを、次の①～⑥の中から二つ選べ。ただし、順序は問わない。

解答欄は、

カ	キ
---	---

。

- ① 音楽学や音楽教育学という学問において、「音楽」を「芸術」であったり、「情操」を豊かにするものであったりということを前提として取り扱うのは適切でない。
- ② これまで音楽研究で校歌を対象とするとき、暗黙のうちに「芸術作品」と見なすような習性があり、そのことが校歌のあり方を考えようとする際に足かせとしてはたらく、校歌に対する考えを歪めてしまっていた。
- ③ 歴史ある私立ミッション系の数多くの学校では、北原白秋・山田耕筰による校歌制定が活発に行われたが、その中でもT女学院の校歌はこの時期の代表作と言ってよいくらい質の高い作品になっている。
- ④ T女学院の校歌について、山田耕筰の原曲と音楽教員の「編曲」との違いはいろいろあるが、一番大きいのはト長調がヘ長調になったことで、低音声部が薄くなって女声合唱的な響きが前面に出るようになったことである。
- ⑤ クラシック音楽の世界では、後世の演奏家による原作の改変を排除する「原典主義」の考え方が唱えられ、それが定着したという歴史をふまえて、多くの学校で校歌を原曲に戻そうとする動きが音楽大学の関係者の間で広まった。
- ⑥ 「愛唱歌」として定着する過程について、ブラームスの『子守歌』は複雑だったリズムが単純化される大がかりな改変だったのでよく知られているが、瀧廉太郎の『荒城の月』は小さな改変だったのでほとんど知られていない。

第3問 次の各問（問一～問八）を読んで、それぞれの指示に従って答えよ。

問一 次のA～Dの各群において、傍線の漢字が適切でないものはどれか。それぞれ①～④の中から一つ選べ。解答欄は、A ア ・ B イ ・ C ウ ・ D エ 。

- A
- ① 欲誘されてテニス部に入った。
 - ② 人口は都市部に偏在している。
 - ③ 彼女の粗野な言動には驚かされる。
 - ④ 紛争の解決に努力している。

- B
- ① 彼の技はプロに匹敵する。
 - ② 郊外に宅地を造成する。
 - ③ 月末に給与明細を受け取った。
 - ④ あの映画は不久の名作だ。

- C
- ① 彼女は会心の笑みを浮かべた。
 - ② 歩道から自転車を撤去する。
 - ③ 横領の嫌疑をかけられた。
 - ④ 伝統の技術を継承している。

- D
- ① 臨場感あふれる映像だ。
 - ② 裁判署の見学に行った。
 - ③ 学生証の再交付を申請した。
 - ④ 大雨注意報が発令された。

問二 次のA～Dの各群において、漢字の読み方(カタカナ表記)が適切でないものはどれか。それぞれ①～④の中から一つ選べ。解答欄は、A オ・B カ・C キ・D ク。

- A
- ① 小豆(アズキ)
 - ② 為替(カワセ)
 - ③ 玄人(シロウト)
 - ④ 蚊帳(カヤ)
- B
- ① 触媒(シヨクバイ)
 - ② 矯正(コウセイ)
 - ③ 更迭(コウテツ)
 - ④ 訴訟(ソシヨウ)

- C
- ① 帆船(ハンセン)
 - ② 割愛(ワリアイ)
 - ③ 踏襲(トウシユウ)
 - ④ 暫時(ザンジ)
- D
- ① 慎(ツツシ)む
 - ② 欺(アザム)く
 - ③ 集(ツド)う
 - ④ 培(ヤシナ)う

問三 次のA～Dのに入る言葉として、最も適切なものはどれか。それぞれ①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、A ケ・B コ・C サ・D シ.

- A 景気の回復がの課題である。
- ① 直属
 - ② 従事
 - ③ 当面
 - ④ 時分
- B お互いに予定をして、打ち合わせの時間を作りましょう。
- ① 整備
 - ② 整合
 - ③ 補整
 - ④ 調整
- C 金にをつけないから、お薦めの料理をどんどん出してください。
- ① 結び目
 - ② 糸目
 - ③ 折り目
 - ④ 切れ目

D 乗用車を して公道を走るのは違法です。

- ① 改革 ② 改造 ③ 改變 ④ 變更

問四

次のA、B、Cの四字熟語の に入る漢字の組み合わせとして最も適切なものを、それぞれ後の①～⑦の中から一つ選べ。解答欄は、A ス・B セ・C ソ。

A 起 回

B 勸 懲

C 同 異

- ① 外―内 ② 有―無 ③ 善―悪 ④ 死―生 ⑤ 天―地
⑥ 大―小 ⑦ 長―短

問五

似た意味を持つことわざの組み合わせとして適切でないものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、 タ。

① とびが鷹たかを生む ― 瓜うりのつるになすびはならぬ

② のれんに腕押し ― 豆腐にかすがい

③ 河童かっぱの川流れ ― 弘法こうぼうも筆の誤り

④ 雀すずめ百まで踊り忘れず ― 三つ子の魂百まで

問六 次のA、B、Cの各群において、傍線部の言葉の使い方が最も適切なものを、それぞれ①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、A チ・B ツ・C テ。

- A
- ① 行きたくないとすこぶる弟を塾に連れて行った。
 - ② 今週は宿題がたくさんあつてすこぶるだ。
 - ③ 毎日散歩をしているおかげで、体調はすこぶる良好だ。
 - ④ 怖い顔をしてすこぶるのはやめてほしい。

- B
- ① つらつらおもねるに、私は恵まれた境遇にいる。
 - ② これ以上症状がおもねるようだったら、病院に行かなくてはならない。
 - ③ 彼は椅子からゆっくりおもねると、立ち去って行った。
 - ④ 彼は年長者におもねるのが上手だと社内で言われている。

- C
- ① 友達の秘密をついぞうっかりしゃべってしまった。
 - ② そんな荒唐無稽な話はついぞ聞いたことがない。
 - ③ 努力したおかげでついぞ優勝を果たした。
 - ④ お客さんはついぞ今しがた帰ったところだ。

問七 次のA・Bの各群において、傍線部の言葉が例文と同じ使われ方をしているものを、それぞれ①～④の中から一つ選べ。解答欄は、A ト・B ナ。

(例文) 白鳥は雪のように白い羽を広げて飛び立った。

- A
- ① 彼のように誠実な人はめったにいない。
 - ② もう雨はやんだように思われた。
 - ③ 彼女は糸のように目を細めて笑った。
 - ④ 「次の試合に勝てますように。」とお祈りした。

(例文) いつの間にか雨は止んでいた。

- B
- ① 今何時ですか。
 - ② どこからか風が吹いてくるのを感じた。
 - ③ 郵便物は二日後か三日後にそちらに着くと思います。
 - ④ 「こら、やめないか。」とたしなめられた。

問八 次の に適切な言葉を入れて文を完成させたい。後の①～⑥の中から に入らないもの一つを選べ。ただし、同じものを繰り返し使用してはならない。解答欄は、 二。

- 情報化社会 、必要な情報 的確 取捨選択する能力 、今後ますます必要 されるようになるだろう。
- ① と ② では ③ に ④ へ ⑤ が ⑥ を

〔現代の国語・言語文化の問題は以上です〕